台密の三昧耶戒について

研究員　寺本　亮晋

三昧耶戒とは密教において用いられる戒である。一般的には、入壇灌頂の直前に授受されるものであり、その作法は三昧耶戒儀、または三昧耶戒作法と呼ばれ、現在でも台密の各灌室は入壇灌頂の直前に授戒作法を行っている。日本に三昧耶戒が将来されて以来、現行の三昧耶戒儀に至るまでには、台密独自の発展と複雑な解釈がなされてきた。そこには密教という性質上、非常に多くの問題がいまだ残されており、研究が立ち後れているのは否めない。また、初期日本天台では、最澄の打ち立てた円戒を充実することが最優先とされたこともあり、結果として以降の日本天台の戒律論は円戒を中心に展開されたことも、三昧耶戒研究の不足の一因であろう。

密教の充実に邁進した円仁や円珍といった学匠は、将来した三昧耶戒儀を利用し、積極的に灌頂を行っている。両者は、三昧耶戒授受といった実際の作法である事相面の充実に重きを置き、三昧耶戒を教学的な視点から捉える記述をあまり残してはいない。これに対して、三昧耶戒を積極的に解釈したのが、台密を大成したといわれる五大院安然である。安然の時代には多くの経典が将来されたことにより、三昧耶戒に対しても研究に事欠かない環境が揃ったのであろう。先師と異なり、三昧耶戒について事相・教相の両面に言及した著述を残している。

安然は、特に戒相を論じることを強く意識していたようである。しかしながら、果たして三昧耶戒の戒相は四重禁たり得るのか甚だ疑問が残る。安然は『具支灌頂』において、『大日経』の四句や『義釈』の解釈を広げ、三昧耶戒を七種に分けて解釈しようとした。例えば、その中の耳語戒に注目すると、耳語戒は一偈か十四五偈かという問題はあるにせよ、安然はあくまで戒相の上で真言の四波羅夷とは区別していた。しかし耳語戒は未伝であることを理由に四波羅夷を代用しており、戒体としては同一であるという解釈に至っている。ただし、戒相は異なれど戒体は同じであるという解釈は、四一教判といった安然の教学的特色から逸脱しないものの、三昧耶戒といった密教戒に至るまで安然の思想が徹底されていたと言えよう。

この七種の戒相を七衆の学処に対応させることによって、戒相が次第を取っているのか、どの戒相を最上に置いているのかを明確にすることは困難であるが、未伝の耳語戒や特殊な持明禁戒を含めることに安然の意図を汲み取ることができよう。これは『大日経』や『義釈』に説かれている戒を全て利用した結果と言える。『金剛頂経』には具体的な三昧耶戒の記述はなく、『大日経』等に頼らなかったことも影響があったに違いない。

安然の『具支灌頂』における戒相説は、三昧耶戒の戒相を明らかにすることを目的としていた。しかし、東密の学

匠である宥祥や宥範は、空海説等を引証して三昧耶戒各々の同異を論ずることはあっても、戒相として捉えることはなかった。

一方、杲宝は、安然の教説を積極的に引用し、三昧耶戒の解釈にも依用したのである。三昧耶戒の同異を戒相という観点から論じる点は、宥範等の解釈に見られないことから、安然説の影響と言えよう。更に、杲宝は戒相と戒体を用いて独自の三昧耶戒解釈を押し進めたのである。また、三世無障礙智戒を密教戒の中心として戒体と論じた点は、宥範の言う「総名」を参考としたのではないかと推測できるのである。

三昧耶戒の戒相、つまり密教において具体的な戒をどのように解釈するかは、古来より台密・東密を問わず関心事である。杲宝が安然の戒相観をもって独自の教説を立てたことは、刮目に値する特色を有するものと言えよう。